

共同居住型災害公営住宅における経年調査による共助関係に関する研究 相馬市長屋型災害公営住宅における事例調査

キーワード：東日本大震災，災害公営住宅，経年調査
共助，高齢化，

石井研究室 菊池 茉奈

1. 研究背景

2011年3月11日に発災した東日本大震災により福島県相馬市は大きな被害を被った。医師でもある相馬市長は仮設住宅暮らしの解消を目指し、2012年5月に高齢者や支援が必要な被災者向けの公営住宅として共同居住型災害公営住宅を計5棟を設置した。この住宅は介護等に対応できる設備を持ち、居住者間の共助コミュニティを促進しながら暮らすことを目的としている。高齢者向けの共助型災害公営住宅を建設したのはこれが日本初である。

2. 調査目的

本研究では、高齢者の孤独化・不安・不自由さを取り除き、居住者同士が見守り合いながら共助の精神で共同生活をするを目的として建設された高齢者向け共助型災害公営住宅を対象として2016年からの4年間、継続し行った調査をもとに身体的変化、居室のしつらえ、居住者間の人間関係の構築を明らかにし、共助関係への影響を明らかにすることを目的とする。

3. 調査対象の概要

調査対象は福島県相馬市に共同居住型災害公営住宅として建設された3か所の災害公営住宅である。また、3つの住宅をA・B・C住宅とする（図1）。3住宅、計14人の居住者が調査の対象である。この住宅への入居条件は『60歳以上で単身』となっているが実際は、介護を要するためバリアフリー設備が必要などの理由により、単身ではなく夫婦・子・孫と同居している居住者もいる。

4. 調査方法

今回は、3つの共同居住型災害公営住宅で暮らす居住者の生活の実態、日常生活における居室の使い方、人間関係などを調査した。A・B・C住宅で行ったヒアリング調査は居住者の生活や共助関係を明らかにすることを目的に雑談を交えながら行なった。B・C住宅では健康状況などの身体的変化を明らかにすることを目的に1人当たり30分程度の個別聞き取り調査を行った。また、各住宅を巡回する管理人へのヒアリングも行った。（表1）

5. 調査結果

5.1 空間利用の状況

この共同居住型災害公営住宅は、居住者間のコミュニティ形成を目的に設計されており、食堂やランドリーなどの共用空間がある。食堂の利用状況に焦点を当て調査を行うとB住宅・C住宅双方の相違点が明らかになった。A住宅では聞き取り調査を行っていないため、この

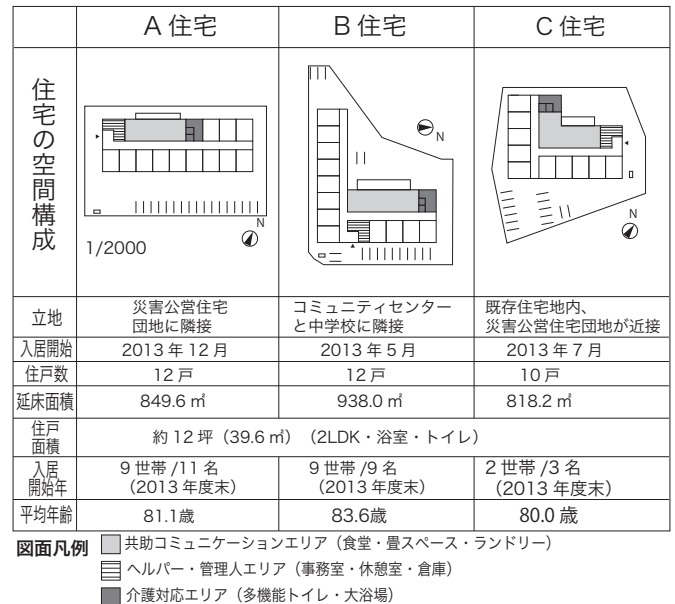


図1：調査対象住宅の概要

表1：調査日時（2019）

	調査日時		
A	2月28日 10:00-12:00	7月25日 10:00-12:00	9月11日 10:00-12:00
B	2月28日 14:00-16:00	7月24日 14:00-16:00	9月4日 14:00-16:00
	9月11日 14:00-16:00	10月23日 14:00-16:00	12月9日 14:00-16:00
C	2月27日 10:00-12:00	7月24日 10:00-12:00	9月12日 10:00-12:00
	10月23日 10:00-12:00	12月9日 10:00-12:00	

表2：住宅別にみる食堂利用の変遷（2016-2019）

住宅名 利用例	B住宅				C住宅			
	'16	'17	'18	'19	'16	'17	'18	'19
(1) お茶会	○	○	○	○	○	×	×	×
(2) 昼食	○	○	○	○	○	△	×	×
(3) 健康相談	○	○	○	○	○	○	○	○
(4) 地域交流	○	○	不明	不明	×	×	×	×
(5) 掃除	○	○	×	○	×	×	×	×

調査の対象は、B住宅・C住宅である。表2に住宅ごとにみる食堂の使い方の経年変化を示す。

B住宅は2016年から継続し、食堂で昼食を取る・お茶会や雑談を行うなど、居住者が自主的に集まる機会があり、食堂を交流の場として利用していることがわかった。一方、C住宅は2016年には行っていたお茶会を居住者間のトラブルを原因に2017年からは行っておらず、2019年現在も交流を目的とした食堂の利用は見られなかった。しかし、昼食前に食堂で会話をする機会もあるので今後、定期的な交流になり得ると考える。

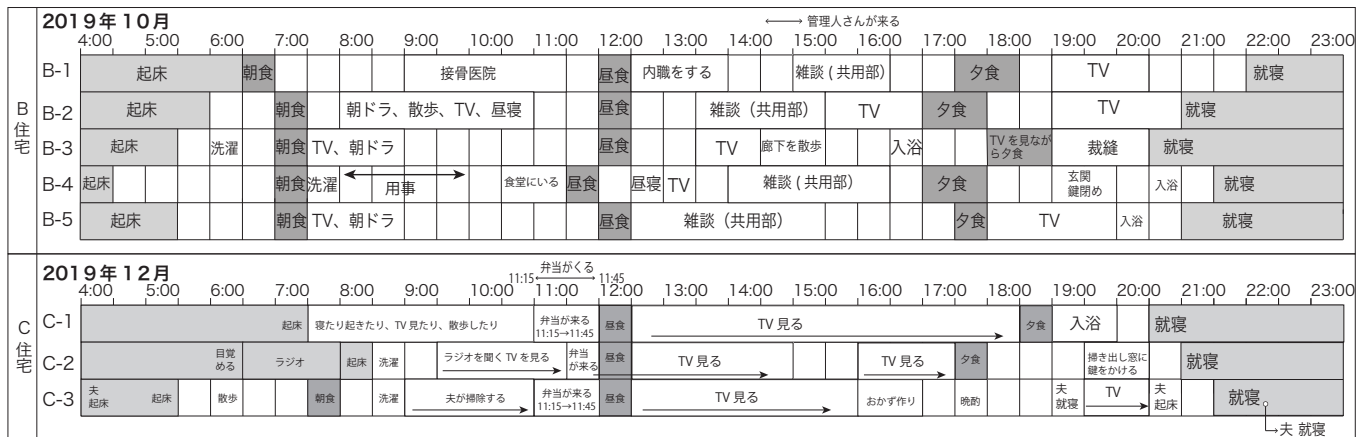


図2：居住者の1日の行動（B・C住宅）

5.2 居住者の身体的変化

4年間の継続調査で居住者の身体状況に変化が見られた。B・C住宅が対象とし個別聞き取り調査を行った。B住宅は入院などにより居住者が減っている。公営住宅への入居前からの付き合いが続いているため、居住者が減ることは他の居住者に心身共に影響を与えている。C住宅では入院・手術をした居住者はいるが、退院後C住宅に戻り暮らしている。C住宅の居住者は1日のほとんどを居室で過ごし、行動量が年々減っていた。

5.3 1日の生活の実態

個別聞き取り調査を行ったB住宅・C住宅を対象に居住者の1日の過ごし方を図2に示す。

B住宅は居住者全員が食堂で雑談をする時間がある。全員が1日の行動の中に雑談の時間があると答えたことから居住者が重要視していることがわかる。また、用事がなければ昼食を食堂で取っている。C住宅の居住者に共通しているのは1日のほとんどの時間を各居室でテレビを見て過ごしていることである。居住者間の交流もなく、経年的に見ると横になるなど行動しなくなっている。

5.4 共助関係の変化

この調査では定期的なヒアリング調査をもとに居住者間の共助関係を分析する（図3）。A住宅は最年少の寮長が居住者の通院の送迎をしていて、居住者が互いの居室に行き来する姿も見られた。B住宅では外出を報告し合うなど居住者間に家族的な関係性が見られた。しかし、B住宅の関係性は寮長である男性頼りとなっていて、居住者間に喧嘩等のトラブルもある。C住宅は近親者との同居が多くその他の居住者との交流は少ないが、関係性は年々発展していることがうかがえた。高齢化や身体状況の変化・居住者の入院や退去により、居住者間の関係性に短時間で影響を与えることが明きらかった。

5.5 居室のしつらえ

今回は2016年に居室のしつらえを調査したB住宅を対象に行った。大きな家具や家電は変わっておらず高齢な居住者自身が移動させることが難しいことがわかる。

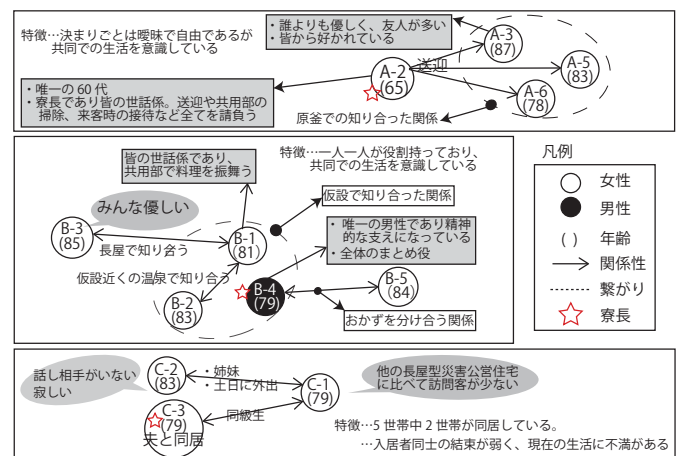


図3：居住者の共助関係のかたち（2019）

また、1日の多くを同じ場所で過ごすこともあり手の届く範囲に物が多くある事がわかった。身体状況の変化に伴い布団を畳むなどの行動が億劫になっていた。

6. まとめ

4年間の経年的調査により、居住者の身体状況や関係性に変化が見られた。共用部の利用状況については、各住宅ごと違いが見られ利用頻度が『変わらない・増えている・減っている』の3パターンであった。共用部の利用は居住者間の関係性も大きく影響していた。

共同共助型災害公営住宅であるため、居住者間に衝突が見られた。高齢化による認知症などが理由のトラブルもあったが共同生活を行う中には起き得るものであると考える。一方で、家族ではない他人である居住者に家族関係にも似た関係性が構築されていた。話し相手がいないと話していた居住者がいたように単身高齢者にとって身近に話し相手がいて、互いの存在を確認し合えると言う事は大きな利点なのではないかと考える。更なる高齢化に伴い様々な変化が予測される。今後も継続的な調査を行い共同居住型住宅の在り方を検証する必要がある。

謝辞：調査では共同居住型災害公営住宅居住者の皆様、管理人の皆様にご協力いただきましたこと厚く御礼申し上げます。